【研究ノート】

ユニバーサル・アクセス時代における高等教育進学者の様態の社会空間アプローチ
――多重対応分析における投入変数とサプリメンタリー変数の関連から――

Preliminary social space approach to students in the era of universal access to higher education

堀兼大朗・相澤真一・森田次朗
Kentaro HORI・Shinichi AIZAWA・Jiro MORITA

1．問題設定

本稿は、『文化・階級・卓越化』に示唆を得て、イギリスでのブルデューの応用アプローチが日本社会、とりわけ日本の大学に通う学生たちの社会空間を把握する上で、どのように適用できるかを、複数の対応分析の結果を提示しながら検討する。

本稿は、『文化・階級・卓越化』の翻訳を通じて示唆を得た研究の一環である。既に、調査票の作成過程については、森田・相澤（2016）で論じており、基礎的な集計結果は、相澤・森田（2016）によって取り上げている。特に、相澤・森田（2016）によって示された基礎的な集計結果によって、中学時代の学校成績と本人の「できること」および文化資本の変数との関係が見られた。本稿は、相澤・森田（2016）のクロス集計による結果を、『文化・階級・卓越化』でも用いられている対応分析によって、社会空間として表現する。また、その際、階層変数を組み込んだモデルとそうでないモデルによる結果の違いを示すことにより、対応分析の適用可能性について議論を行う。方法論における先行研究の検討は次節に見ることにして、本事例が持つ意義を再確認しよう。著者の一人である相澤は、日本社会におけるピエール・ブ

ルデューの受容についての研究を英語で発表し（Aizawa & Iso 2016）、そのなかで、仮説的に、フランスの教育システムが「国家貴族」の育成機関であるというブルデューの議論に対応して（Bourdieu 1989 = 2012）、日本の教育システムが「国家平民」（State Common）の育成機関であるという議論を展開した。ブルデューの『国家貴族』において、中等教育から高等教育への移行において、エリートが選抜される過程が注目されるのに対して、日本の教育拡大では、しばしば大衆化およびユニバーサル・アクセス化が何をもたらしてきたのか、に注目した議論である。20 世紀までは、このような教育拡大による生徒･学生気質の変化については、主に高校段階に注目が当たっていた（例えば、門脇・飯田編 1992; 門脇・陣内編 1992 など）。しかしながら、2007 年に大学進学率が 50％を超えた後、大学生の変化やそこにおける社会的不平等・格差についても注目を集めつつある[1]。このような高等教育へのユニバーサル･アクセス化と不平等問題の浮上という問題意識は、『文化･階級・卓越化』の調査の行われたイギリスでもいささか異なるコンテクストながら生じており、イギリス社会学会が公式に書籍を発行して世に問う事態となっている（Waller et al. 2018）。

このような状況において、いわゆる受験偏差値の点でも世間の評価においても比較して「真ん中」に位置すると考えられる本学の学生に行った質問紙調査を通じて、現代日本の高等教育を受ける学生たちのなかの差異を社会空間として見出すのが本稿で行う試みである。

２．先行研究の検討
――『文化・階級・卓越化』とそれ以外の社会空間的アプローチから

ブルデューの『ディスタンクシオン』および 2000 年代イギリスで応用されたベネットら『文化・階級・卓越化』で重要な方法として用いられているのが多重対応分析である。近年、日本でも対応分析を用いた応用研究がさまざまに発表されるようになってきた。

この際、方法論的な差異と立場の違いを生んでいるのが、階層変数や属性変数についての扱いである。『ディスタンクシオン』や『文化･階級･卓越化』では、「収入、学歴資格、社会的出自、年齢」や「社会人口的変数」は、追加要素として、プロットに重ねあわされている（Bourdieu 1979=2010; Bennett 2009=2017: 93, 494）[2]。

一方で、このブルデューのアプローチに示唆を得て「社会空間アプローチ」を 2010 年前後から提示してきた近藤博之は、例えば SSM2005 データを用いた対応分析を行っており、ここでは階層変数を投入し、この第 1 軸での経済資本の強さの説明力を提示している（近藤 2011）。さらに、近藤は PISA データを用いて、やはり階層変数を投入した多重対応分析を用いて、学力に対する階層変数の強さを説明している（近藤 2012）。著者の一人の相澤もこの近藤の分析に倣い、東京の一自治体を対象とした社会調査データを用いて対応分析を行った結果、階層性とともにライフスタイルとしての子どもの国私立小中学校への進学意識の関係が現われたことを分析してきた（相澤 2015）。

しかしながら、当然のこととして、ブルデューの『ディスタンクシオン』を厳格に応用する立場からすれば、このような階層変数を投入した対応分析を行うのは間違いであるという指摘が行われるのも無理のないことであろう。早くからこのような立場から文化的な変数のみで社会空間を提示する分析を行ってきた片岡（2003）のほか、近年では、SSM データを分析した磯・竹ノ下（2018）や趣味の分析を行った北田（2017）、また本稿同様に学生を対象としたアンケートを用いて対応分析を行った香川（2018）などでは、基本的によりブルデューの分析に厳格に則った立場として、階層変数を投入せず、特に香川（2018）ではサプリメンタリー・ポイントとしてプロットする手法が用いられている。近藤も最近の研究では、そちらの立場にシフトしつつあるようである。

このような研究動向を踏まえると、対応分析を用いる際は、階層変数を投入するのが誤りで、サプリメンタリー・ポイントとしてプロットするのが正しいという流れができつつある。理由を一つ上げるならば、従来、社会における差異を説明するのに用いられてきたような階層変数の説明力が高いのは当たり前であり、このような変数を用いれば、近藤（2011）や相澤（2015）にも見られるように、第 1 軸（主に経済資本の総量と考えられる）の説明率が 6 割を超えるような結果がしばしば見られることとなる。また、磯・竹ノ下が論じるように「ブルデューが捉えようとしたのはそれとは異なる文化のエコノミー」（磯・竹ノ下 2018）であるとするならば、ブルデューを応用する、あるいは、『文化・階級・卓越化』を応用するという立場をテキスト通りに行おうとするならば、階層変数は空間を構築する変数からは削除して、サプリメンタリー・ポイントとしてプロットする方が正しいアプローチのよ

うに見える。

では、階層変数を組み込んで対応分析を行うことは間違いなのであろうか。少なくとも、統計計算上の問題はないはずである[3]。むしろ、そこで問われるのは、どういう社会学的な理論を背景としようとしているのかであり、また、そこでどのような事象に迫ろうとしているのかによって使い分けられるべきあくまで方法の立場の問題ではなかろうか。そこで、本稿では、既に、相澤・森田（2016）で見られた学生の間での差異が、階層変数を組み込んだ対応分析とそうではなくサプリメンタリー・ポイントとしてプロットした社会空間との両者において、どのように表現されるかを、結果の相違を示しながら提示する。ここで、対応分析という手法が持っている本来の「柔軟性」について、再度、考察において検討を行う。

３．研究方法と使用データ

本稿で用いるデータは、「中京大学生の生活と意識についての調査」の調査データである。既に、調査企画については、森田・相澤（2016）にて、クロス集計表による分析結果については、相澤・森田（2016）で示している。

このうち本人の文化的な面を含む多様な能力として調査した項目が問 10 であり、「50 人前後以上を前にしても問題なく話すことができる」、「ブログや SNS、あるいは個人的な日記などで日常的にまとまった文章を書ける」、「自分の住む街の道端で困っている外国人に英語で道案内ができる」、「楽譜を見て、歌ったり、演奏したりできる」、「「印象派の絵」と言われて、どんな感じの絵かイメージできる」の５項目と「現在の成績」の計６項目を空間構築変数にしている。

以下の分析では、次の4パターンの多重対応分析の結果を提示する。第1に、この６項目に絞り、属性変数・階層変数については、サプリメンタリー・ポイントとしてプロットした事例を提示する。第２に、能力に関する変数に加え、さらに、今現在、力を入れていること（講義・ゼミや卒論・アルバイト・趣味・部活サークル）を活動の変数として多重対応分析に空間構築変数として投入する。その上で、世帯収入、親の学歴、中学成績、学部に志望して入った、高校時代に取り組んでいたもの（受験勉強、部活）、出身高校における大学進学割合をサプリメンタリー・ポイントとして、プロットする。第３に、1，２とは別に、属性変数・階層変数のみ（世帯収入、親の学歴、中学成績、

家の本の数）で構成した多重対応分析のプロットを提示する。第４に、第１の６項目の変数と第３の属性変数・階層変数を組み合わせた多重対応分析のプロットを提示する。なお、どの分析においても、若干、男女差が見られたため、すべて男女別に提示する。

４．分析結果

4-1　５項目の能力と大学の成績による多重対応分析結果

図１に示したのは、男性における５項目の能力と大学の成績による多重対応分析結果である。男性の場合、横軸に何かができる／できないという軸が第１軸に表れ、第２軸は、美術（印象派を判別できる）や音楽（楽譜を理解できる）かどうかというのが縦に並んでいるのがわかる。一方で、家の世帯収入、両親学歴、本人の中学成績をサプリメンタリー・ポイントとしてプロットしたものの、年収が 800 万以上を中心に上下で並ぶなど、あまり明瞭な傾向は見いだせなかった。ただ、一応男子学生の場合は、中学の成績とこのような何かができるという能力との関係は見いだせるようである。なお、イナーシャの寄与率は第１軸で 33.1％、第２軸で 18.0％であった。

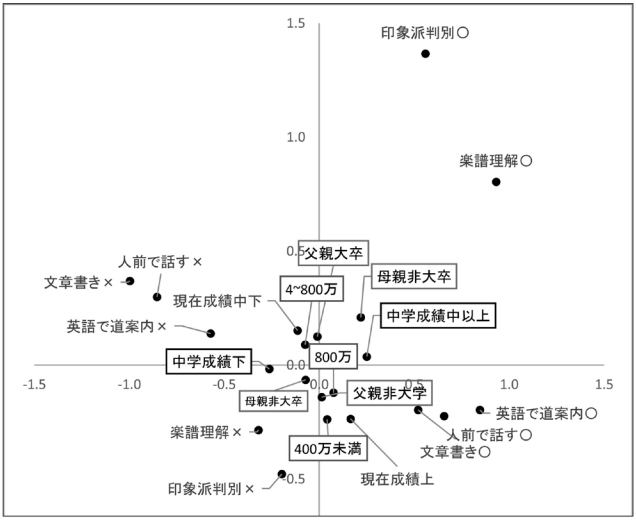

図１　５項目の能力と大学の成績による多重対応分析結果（男性）

図２は同様の変数を用いて女子学生をプロットしたものである。女子学生

の場合は、さらに能力の点でも読み取りが難しくなる。全体的に第１軸の右側に能力を示し、第２軸に現在の成績の上下（ただし一般的な上下とは反転）の関係を見ることができる。ただ、能力や出身階層についての一貫した解釈を見出すのが少し難しくなる。なお、イナーシャの寄与率は、第１軸で26.7％、第２軸で18.5％であった。

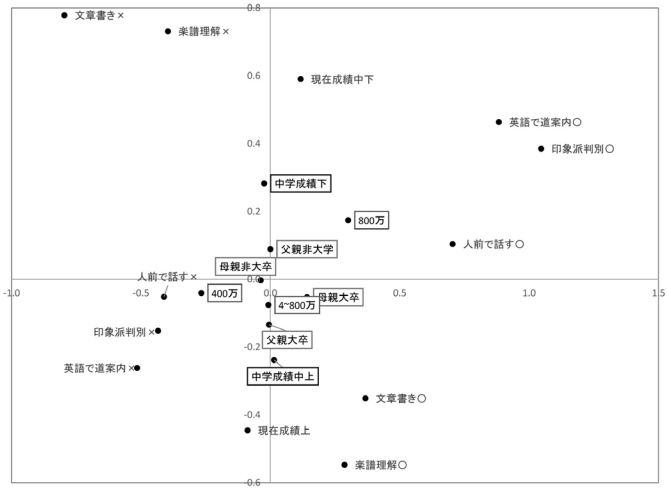

図２　５項目の能力と大学の成績による多重対応分析結果（女性）

4-2　５項目の能力に加え、現在の大学生活に関する項目を加えた多重対応分析結果

4-2 の２枚の図は、５つの能力に加えて、大学生活で何を重視して過ごしているかについて回答してもらったものである。4-1 に加えて、どのような情報を得ることができるであろうか。

図３の男性の場合、第１軸は、図１同様に能力についての項目が並んでいる。そこに大学で講義、部活・サークル、趣味、アルバイトの項目を打ち込んでいる場合は右の象限に寄っている。一方で、縦軸に成績の上下が並び、また、講義を熱心に受けるか否かが縦にはっきり並んでいる点を考えると、横軸はマルチに何かをできることを示し、縦軸は学業成績を中心とした軸と読み取ることができるであろう。一方で、図１以上にサプリメンタリー・ポイントは中心に固まってしまっており、全体の一貫した傾向を見出すことが

難しくなっている。なお、イナーシャの寄与率については、より多様なものを入れたためか低下しており、第１軸が 20.2％、第２軸が 13.2％であった。

女性の場合を見たのが図４である。こちらの場合だと、「印象派の判別」、「人前で話す」、「英語で道案内」といった項目が横軸に並び、さらに、サプリメンタリー・ポイントでプロットした世帯年収が横軸に並んでいる。家庭の出身背景を生かした能力形成の可能性を見る上では興味深い結果と言えるかもしれない。また、第２軸では、他のできることとは別に「楽譜理解」と「文章書き」が上下に配置され、また、高校の部活（やっている場合が上でそうでない場合が下）と母親の学歴が同じ方向で並んでいる。この点では、学校的なものと家庭を背景とした文化的な関係を読み解く上では図４は何らかの示唆を与えているようにも見ることができる。男性同様にイナーシャの寄与率は下がっており、第１軸が 17.6％、第２軸が 12.1％であった。

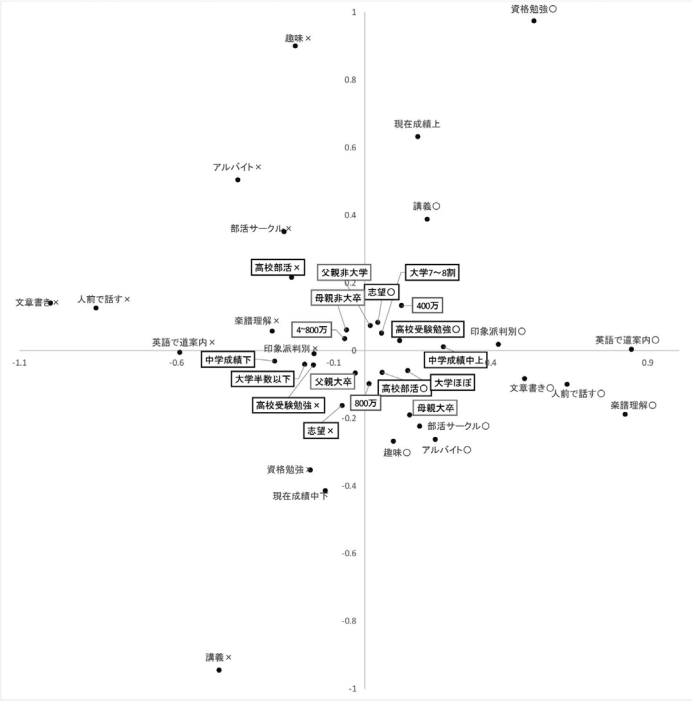

図３　５項目の能力に加え、現在の大学生活に関する項目を加えた多重対応分析結果（男性）

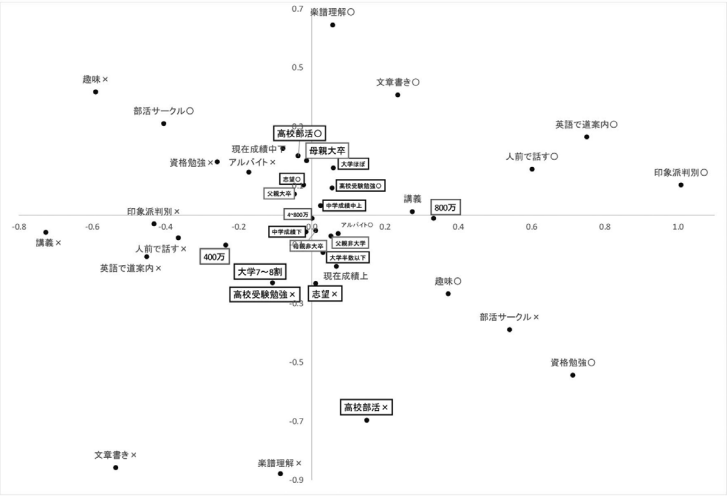

図４　５項目の能力に加え、現在の大学生活に関する項目を加えた多重対応分析結果（女性）

4-3　階層変数・属性変数のみを用いた対応分析結果

ところで、そもそも今回階層変数あるいは属性変数と位置付けている変数はどのような関係にあるのだろうか。これを見たのが図５（男性）と図６（女性）である。

図５は、軸が反転した計算結果なのでいささか見づらいかもしれないけれども、明瞭な傾向を示しているのは、両親の学歴が第１軸の軸近くに負の方向に大卒、正の方向に非大卒が並んでいる。収入の一貫した傾向は読み取りづらいものの、第２軸に出身家庭における本の数が並びそれよりは小さい差であるものの中学時代の成績も上下に並んでいることがわかる。第１軸に両親の学歴、第２軸に学歴以外の文化資本が並び、収入は間接的に影響していると読み取れるのかもしれない。なお、イナーシャの寄与率は第１軸において 32.0％、第２軸において、22.4％であった。

女性の結果である図６でも、第１軸は、両親の学歴が第１軸に並んでいる。そこに縦軸には、高い実家世帯年収のカテゴリーがプロットされ、そこに中学成績下と本棚２段以上がプロットされている。一方で、中学成績が高いものの、世帯収入が相対的に高くない人たちが第２軸において負の方向にプロットされている。なお、イナーシャの寄与率は第１軸において 31.1％、第

2 軸において、22.8％であった。

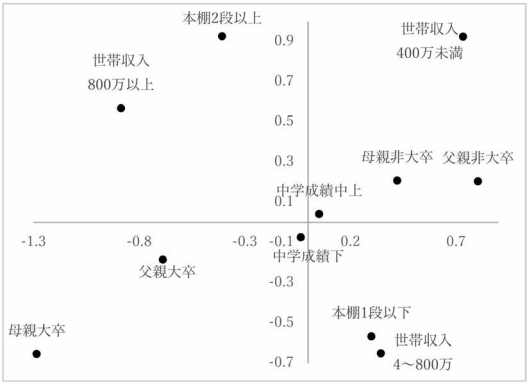

図５　階層変数・属性変数のみを用いた対応分析結果（男性）

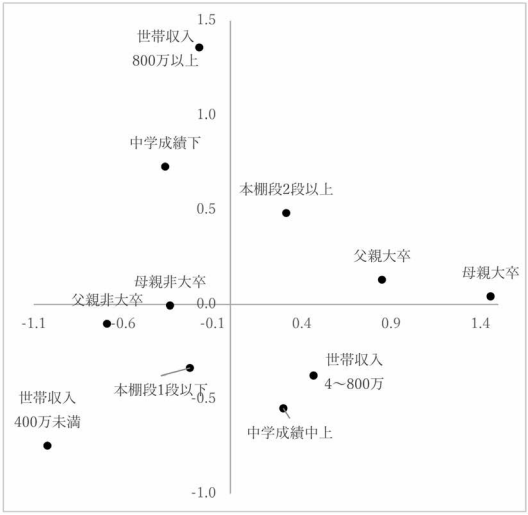

図６　階層変数・属性変数のみを用いた対応分析結果（女性）

なぜ、図 5、図 6 共に、このような少し屈折した結果が出たのであろうか。これは、ひとえに一大学からサンプルしたことに起因するものではないかと考えている。本学の場合、一定の選抜度のある入試は行っているものの、本学より上の大学に受かれば行ってしまうような大学も多数存在する。そのた

め、大学生全体のサンプルよりも上の部分が抜けており、成績上位で、学業以外の能力にもおしなべて恵まれているという学生がサンプルに入っている可能性は決して高くない。どちらかといえば、家庭的な背景には恵まれなかったり、大学受験時の情報面ではいささか不利でも本人の努力に入ったというケース（図６でいえば、第２軸の下の方に位置するケース）や逆に自分の勉強はあまりできなかったけれども、部活動が秀でていたり、家庭的に恵まれているがゆえに、多種多様な入学試験のいずれかを突破して入学するケースも見られる。図６にとりわけ特徴的であると言えるが、このようなサンプルした学生の特徴が反映したものではないかと考えられる。

4-4　階層変数・属性変数を組み込んだ５項目の能力の対応分析結果

4-3 の対応分析の結果は、サンプル全体における出身階層や属性を見る上では、比較的効果的な結果であった。これを踏まえて、4-1 に示した５項目の能力について、階層変数・属性変数を組み込んで対応分析を行ったのが、図７（男性）、図８（女性）である。

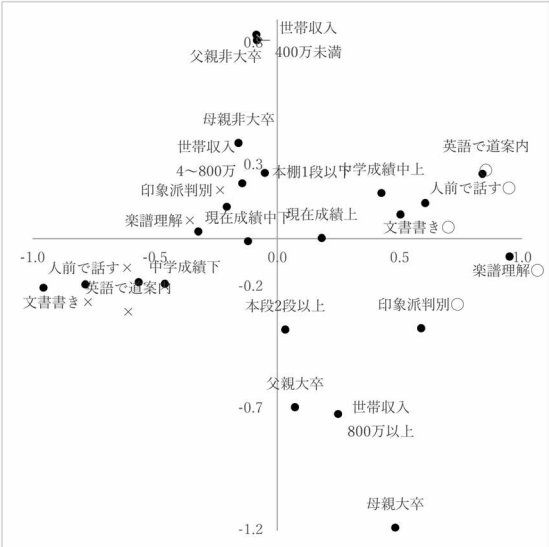

図７　階層変数・属性変数を組み込んだ５項目の能力の対応分析結果（男性）

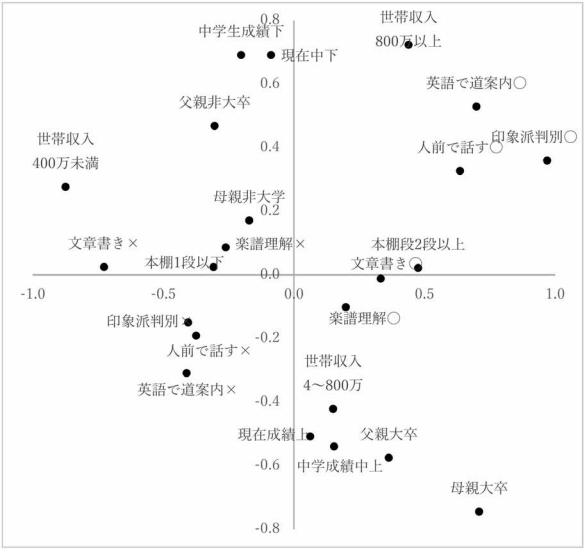

図８　階層変数・属性変数を組み込んだ５項目の能力の対応分析結果（女性）

男性の結果を示した図７によると、多様なものを含めたため、イナーシャの寄与率は第１軸において 19.8％、第２軸において 14.5％と低下している。しかしながら、能力と階層の関係を見た場合、何かができるという能力の軸が第１軸にきれいに並び、第２軸の正負の方向は逆になっているものの、負の方向に両親大卒学歴、世帯年収 800 万以上、本棚２段以上が並び、それとは異なる変数が正の方向にプロットされることがわかる。すなわち、第１軸が、本人が今できる能力、第２軸が家庭の影響というのが明瞭に分類することができた図を示している。

女性の結果を示した図８を見てみると、同様にイナーシャの寄与率は、第１軸において 16.3％、第２軸において 14.7％と低下している。男性ほどは明瞭な区分ではなっていないものの、「英語で道案内」、「印象派判別」、「人前で話す」という図４でも収入のサプリメンタリー・ポイントの近くにあったものがまとまって第１象限に集まっていることがわかる。これに対して、第２軸付近では、正の方向に低成績（現在、中学時代共に）と両親非大卒が固まり、下の方向に成績上位がプロットされている。この結果を含めて考えると、第１軸は、収入の影響を受けつつもマルチに何かできる能力、縦軸に学

業成績という点で、男性とは異なる分類になったとともに、図４とは一貫した解釈のできる結果ができたことがわかる。なお、学生の英語運用能力については、女子学生の方が比較的高く、かつ、それが世帯年収に影響するという結果は、既に見たことがあり[4]、それとも一致する。

５．考察とまとめ

本稿では、サプリメンタリー・ポイントをプロットした対応分析と空間構築変数に組み込んだ対応分析による結果の違いを見ながら、対応分析による分析の可能性を見てきた。

結論から言えば、どのような問いのもとで、どのような事象に注目したいのかに寄るのであろう。ブルデューやベネットらに準拠した文化の分析を行いたければ、階層変数や属性変数はあくまでサプリメンタリー・ポイントとしてプロットすればよいのであろうし、むしろ、本稿のように、学生が能力的・文化的にできることにたいして、社会的背景がどのようにかかわるかを直接的に見たければ、空間構築変数に組み込んだ分析を行えばよいと考えられる。Clausen の訳書で藤本一男が述べるように、対応分析は柔軟な分析方法である（藤本 2015）。本特集の知念論文にもあるように、小さなサイズのサンプルにも対応できる。この柔軟性を生かして、社会理論とデータの両方と対話しながら、根拠と解釈を明確にしながら対応分析を用いていけばよいのではないかと考える。

【付記】 本稿は、2015 年度と 2016 年度に森田次朗が中京大学より研究支援を受けた特定研究助成の成果（課題番号：1520513、1620530）、及び、JSPS 科研費（課題番号：16H05955）による成果の一部である。分析については、堀が相澤・森田との相談のもと、全面的に担当した。分析に用いたソフトウェアは SPSS Categories 24.0 である。本文の執筆は相澤が行っている。

［文献］

相澤真一，2015,「教育――子どもを私立に通わせる家庭のライフスタイル」山田昌弘・小林盾（編）『ライフスタイルとライフコース―データで読む現代社会』新曜社，144-157

Aizawa, Shinichi, and Iso, Naoki, 2016 “The Principle of Differentiation in

Japanese Society and International Knowledge Transfer between Bourdieu and Japan”, Derek Robbins (ed.) *The Anthem Companion to Pierre Bourdieu*, Anthem Press.

相澤真一・森田次朗，2016,「社会調査データによる日本の社会的分断線の構成要素に関する探索的検討――東海圏の大学生調査の基礎集計から」『中京大学現代社会学部紀要』10 (1): 169-188.

Bennett, T., et al., 2009, *Culture, Class, Distinction*, London: Routledge.（= 2017，磯直樹・香川めい・森田次朗・知念渉・相澤 真一訳『文化・階級・卓越化』青弓社.）

Bourdieu, Pierre, 1979, *La distinction. Critique sociale du jugement*, Paris, Éd. de Minuit.（ =1984, Tralslated by Richard Nice, *Distinction: A Social Critique of the Judgement of Tasete*, London : Routledge.; = 1990, 石井洋二郎訳『ディスタンクシオン――社会的判断力批判』藤原書店.）

Bourdieu, Pierre, 1989, *La noblesse d"État. Grandes écoles et esprit de corps*, Paris, Éd. de Minuit.（=2012, 立花英裕訳『国家貴族――エリート教育と支配階級の再生産Ⅰ・Ⅱ』藤原書店.）

Clausen, Sten Erik, 1998, *Applied Correspondence Analysis: An Introduction*, SAGE.（= 2015，藤本一男訳『対応分析入門――原理から応用まで』オーム社.）[5]

磯直樹・竹ノ下弘久，2018,「現代日本の文化資本と階級分化―1995 年 SSM データと 2015 年 SSM データの多重対応分析」『2015 年社会階層と社会移動調査研究会（SSM2015）報告書　意識 I』17-37.

門脇厚司・飯田浩之編，1992,『高等学校の社会史――新制高校の＜予期せぬ帰結＞』東信堂。

門脇厚司・陣内靖彦編 , 1992,『高校教育の社会学――教育を蝕む＜見えざるメカニズム＞の解明』東信堂。

片岡栄美，2003,「「大衆文化社会」の文化的再生産　―階層再生産・文化的再生産とジェンダー構造のリンケージ」)」宮島喬・石井洋二郎編『文化の権力　反射するブルデュー』藤原書店。

近藤博之，2011,「社会空間の構造と相同性仮説」,『理論と方法』, 26(1), 161-177.

――――，2012,「社会空間と学力の階層差」,『教育社会学研究』, 90, 101-121.

森田次朗・相澤真一 , 2015,「P・ブルデューにおける社会調査法の応用可能性――『文化・階級・卓越化』の翻訳作業をとおして」『中京大学現代社会学部紀要』9 (2), 161-188.

Waller, Richard, Nicola Ingram, and Michael RM Ward, eds. 2017. *Higher education and social inequalities: University admissions, experiences, and outcomes*. Routledge.

---

[1] 例えば、2010 年代にまとめられてきた『リーディングス　日本の高等教育』（玉川大学出版部）や『シリーズ大学』（岩波書店）はこのような問題意識を反映している。

[2] この「追加要素」（supplementary elements）は、Clausen の訳書では、「サプリメンタリー・ポイント」としてそのプロットの仕方が提示されている（藤本 2015: 105-12）。

[3] 例えば、Clausen（1998 = 2015）では、ブルデューの『ディスタンクシオン』を紹介した上で、ノルウェイの生活保護受給者の社会空間について、人口統計学的変数を社会空間の構築変数に含めた分析を提示している（Clausen 1998=2015: 41）。

[4] 相澤の担当による 2015 年度の社会調査実習ならびに 2016 年度の卒業生の平野裕加里が大学間比較調査の量的・質的調査で見出した結果と一致している。

[5]『対応分析入門』の日本語版は、訳者の藤本一男によって長大な解説が付されており、これが書籍のボリュームの半分以上を占める。本稿では、この藤本からの引用箇所については、藤本（2015）と示した。